魚類相の変化

■冬を越す死滅回遊魚たち

皆さんが最近海に行った時、熱帯魚みたいな魚を見た人はいませんか？その魚はいつ見ましたか？夏でしょうか冬でしょうか？

近年、高知の海では熱帯魚といわれる南方系の魚たちが増えてきています。沖縄などの暖かい海から卵や稚魚が黒潮によって遠くまで運ばれ、たどり着いたのです。しかし、暖かい海に生息する魚は夏の水温が高い時期には元気に成長しますが、冬が来て水温が約15℃以下に低下すると、寒さに耐えきれずやがて死んでしまいます。このような魚たちのことを死滅回遊魚、もしくは季節来遊魚といいます。夏の海で見た熱帯魚が冬に見られなくなるのはこのためです。しかしここ数年、冬を越して成魚となっているものを数多く見かけるようになりました。これは海の温暖化によるものです。

土佐湾の海水温は1980年代始めから現在に至るまで上昇傾向にあり、特に夏場よりも冬場の低水温期の海水温が大きく上昇していることがわかってきました。南方系の魚たちが冬を越し住み着くことによって、高知の海の生態系はどうかわっていくのでしょうか？ 皆さんで考えてみてください。

▲ サンゴの上に群れているスダレチョウチョウウオ（幼魚）（中央の個体）とトノサマダイ（幼魚） ⓒ平田智法

土佐市横浪周辺の海にはチョウチョウウオの仲間の稚魚がたくさん流れ着きますが、そのほとんどは冬を越すことができずに死んでしまいます。

柏島の魚たち

日本一魚が多いことで知られる柏島（高知県大月町）には、1,000種類を超える魚が生息しており、死滅回遊魚が冬を乗り越え成長している姿を見ることができます。

ⓒ松野和志 ⓒ西村直樹